
IS ～ 仮面戦士の名を継ぐ者 ～

宏明

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS〈仮面戦士の名を継ぐ者〉

【Nコード】

N4612Z

【作者名】

宏明

【あらすじ】

残念な死にかたをした青年がISの世界にテンプレ転生する物語。
ISの作品に仮面ライダーの設定を入れた二次創作です。

転生しました（笑）（前書き）

気分転換に転生物を始めました。

転生物、別作品のクロスなどが嫌いな方は戻って下さい。

転生しました（笑）

「此処はどこですか？」

やあ、俺は本郷戒『ほんごう かい』気がついたら真っ白な空間にいたんだ。

ちよ、物を投げないで。本当に覚えが無いんだってば。

「君は誰と話しているんだい？」

うわっ！？ いきなり目の前にイケメンな青年が現れた。とりあえず此処がどこなのか訊いておこう。

「すみません。此処がどこなのかご存知ですか？」

「此処かい？ 此処はね、人間の言葉で表現するならあの世って所さ」

「あの世！？ ってことは俺、死んじゃったの！」

まだ二十歳までしか生きてなかったのか！

そりゃ……あまり良い人生とは言えなかったけど、死んで変な空間に来るなんて、それなんて二次創作物テンプレだよ。

「まあ……ぶっちゃけこれ、小説だし？」

「メタ発言禁止！」

青年の言葉にツツコミを入れる。

「……あれ？ 俺、声出していました」

青年はニコニコと笑いながら首を横に振る。

「僕は神だからね。君の思ってる事なら何でも分かるのさ」

神ー！？ マジでテンプレだよ。

「そ、それで神様。俺はどんな死に方をしたんでしょうか？」

記憶には無いけど、車に跳ねられそうになった子供を助けたとか？

「ぷっ」

笑われた！？

「ごめんごめん。つい思い出し笑いをしてしまったよ。君の死に方があまりにも面白かったから」

神様が持っていた杖を振るうと、頭に何かが浮かんできた。

『くっそう両手に荷物を持ってたのに何で俺が痴漢と間違えられないといけないんだよ』

それは此処で目覚める前の俺。

確か秋葉原でISのDVDや仮面ライダーのフィギュアを買った帰りの電車で痴漢に間違えられ、警察署で説教された後の出来事だ。

帰り道の公園で苛立っていた俺が足下の空き缶を蹴ろうとして足を滑らし、忘れ物だとおもいき三輪車のサドルに頭をぶつけていた。

「……何これ」

「ぶぶ、勿論君が死ぬ直前の出来事さ」

神様は腹を抱えて笑う。

いくらなんでもこれはないだろ。めっちゃ恥ずかしい。これならまだ知らない方が幸せだよ。

「それで、神様は何で俺をここに？」

もう様とか付けるのも嫌になりつつも、その目的を聞くことにした。

「ああ、君の死があまりにも面白じゃない、不憫だったから転生させてあげようと思ってね」

こいつ、本当に神か？ 俺には悪魔にしか思えん。

「と、いう訳で君はこれからISの世界に転生するのさ」

ISかぁ……。俺は仮面ライダーの方がいいんだけどなあ。女にはあまり良い思い出ないし。

「それじゃ事情説明も済んだし、そろそろ君の新しい物語を始めようか」

え？　こういうのは神がチート能力をくれたりするんじゃない？

「あのねえ、いくら神でも二次創作のような力を持つてる訳ないじゃないか。僕は人間の魂を別の世界に転生させる程度しかないよ」

神のやれやれという仕草にイラッときた。

「さて、僕にも仕事があるからサクサクと進めるよ。君の面白い人生を期待してるから。バイバイ」

神が手を振ると急に足場に黒い穴ができて、俺はまっ逆さまに落ちた。こんなところはテンプレにしくなくても良いじゃないかー！

転生しました（笑）（後書き）

どうも宏明です。

武神装甲インフィニットストラトスがなかなか進まないので気分転換に始めました。

相変わらず駄文ですが感想よろしくお願いします。

本郷 戒は改造人間である（前書き）

第二話です。何気に結構残酷な描写がされてるので注意。

本郷 戒は改造人間である

インフィニット・ストラトス。通称『IS』

篠ノ之^{しののたはね} 束^{たはね}という一人の天才少女が生み出したマルチフォームスー
ツ。

宇宙での活動を目的として産みだされたが、発表当時は相手にされ
なかつた。

誰だつて『現行の最新兵器すら軽く凌駕する』なんて言われたら「
小娘^{こむすめ}ごときがそんな物作れるか」と言うだろう。

それから1ヶ月経つた頃、世界に激震が走る。

なんと、世界中のコンピューターが何者かにハッキングされ、20
00発以上のミサイルが日本に向けて発射されたのだ。

誰もが日本の終わりに絶望した時、一人の女性がISを纏い、剣と
開発途中の荷電粒子砲で全てのミサイルを迎撃して見せた。

世界はその性能に恐れを抱き、捕獲、あるいは破壊しようとしたが、
圧倒的な力の差を見せつけられる結果となった。

世界はIS中心のものへと変化を余儀なくされる。

しかし、ISには重大な欠点が存在した。

それは 『女』にしか動かせないという事。

世の男共は空を飛ぶことを奪われ、世界最強の兵器を動かせる女が優遇される時代……女尊男卑社会となった。

それから10年。ISは兵器からスポーツへと変わり、そこへISを動かした『男』が現れた。

ISを動かした男は15歳の少年。

彼は女ばかりの学園『IS学園』へと入学し、大変ではあるが楽しいスクールライフを送っていた。

しかし、いつの世も優れた物を悪用する者達がいる。

彼らは闇に潜み、今日も罪なき者達を巻き込む。

4月の下旬、桜の花びらがちょうど全部なくなった頃、神によって無理やり転生された少年の物語が動き出す。

ドオオオンッ!!

大空を飛んでいた飛行機が突如爆発する。

「ヒュウッ、たーまやー」

それを間近で見ていた女がいた。彼女は蜘蛛のような装甲脚を背中から生やしたIS『アラクネ』を操縦し、どこかの軍から盗んだ最新兵器で飛行機を撃ち落としたのだ。

なぜそんな事をしたのか？ 理由はあの飛行機にISの『コア』があり、それを盗むため。ついでに新兵器の試し撃ちをしたから。

彼女は自分の恋人以外はみんなゴミだと認識している。

だから残酷な手段に躊躇いはしない。

「さてと……後は目標の物を回収するだけだ」

ISのコアは特殊な金属で作られているので、この程度で壊れはしないのだ。

「へえ……。あの爆発に巻き込まれて生きてるなんてゴキブリみたいな生命力だな」

目標の物の側に着陸した彼女は両手両足を失い、顔の半分が焼け爛れた少年を見つけて感心する。

その少年にはまだ息があつた。

彼のお腹にISのコアが埋まっており、奇跡的に生きている。

彼女は少年ごとコアを回収して自分が所属する秘密の組織『亡国機業』へと帰還した。

目を開けると知らない天井だった。

そういえばこの世界に転生する前にも似た体験をしたな。

とりあえず状況確認だ。両手両足は鎖に繋がれており、何かの台に俺は寝かされていた。

「ふんッ！」

腕に力を込めると鎖は簡単に千切れた。俺って怪力だったわけ？

周りを見回す。どうやら此処はどこかの研究所らしい。

「ほほう、目が覚めたかね？ 少年」

ドアが開くと白い髭を生やした老人が入ってくる。服装が白衣から、おそらくここの研究員だろう。

「あんたは誰だ？ それにここは？　なんで俺はこんな所に？」

「そんないつぺんに質問するでない。順を追って説明してやる。俺は諸星徹夫もろぼしてつお科学者じゃよ。ここは秘密組織亡国機業の秘密研究所。お主はモルモットとして重症のところを連れてこられたんじゃ」

重症……？　そういえば乗っていた飛行機が眩しい光に包まれた瞬間、意識を失ったんだっけ？

「ぜんぜん体は健康そうだけど？」

ちゃんと手足はあるし、かすり傷もない。

「カカカツ、お主は爆発した飛行機から奇跡的に助かり足りない部分は俺が作ったんじゃ。要は改造人間というやつじゃな」

転生の次は改造人間かよ。ろくな人生を歩んでないな。

「しかし、なんでモルモット？　俺はただの人間だったはず」

何よりあの爆発で生きていたことが不思議だ。

「お主が発見された時、手足は無く、顔の半分は焼け爛れておった、しかもその腹にはISのコアが入り込み、シールドバリヤがお主を守ったと僕は思っとる。実際、コアはお主に反応したからのう」

「なるほど、俺は世界で二人目のISを動かせた男ってわけか」

「うむ、結局動かせた原因は解らなかったがな」

じいさんの説明を聞いている間に体が馴染んできた。生前よりも力がみなぎっている感じ。

「そのISのコアは今どこにあるんだ？」

じいさんは薄気味悪く笑う。そして、その事実には俺は絶句することになる。

「お主の腹の中じゃ。今お主はISと融合した世界で初の人型IS
じよからのう」

マジで仮面ライダーじゃないか。しかも1号。

「なにはともあれ、こうして生きているわけだし、まあいいか」

俺の超ポジティブ発言にじいさんは驚いていた。

「えらくあつさりと信じたな。普通は発狂してもおかしくないんじゃないが」

「一度死を体験してるからな。今さらって感じ？」

死んでアニメの世界に転生したんだぜ。お化けだって信じられるさ。

「かつかつかつ！ お主は本当に面白い男じゃな。ますます興味を持ったぞ。お主、名前は？」

「本郷 戒だ。それでじいさん、俺をどうするつもりだ？」

亡なんちゃらが悪の組織なら、これから悪事をさせられるだろう。

「別に何も。儂はただ、人間とISを融合させた最高傑作を作ったただけじゃ。お主がここから逃げようが儂は知らん。洗脳と裏切り防止の手術を受けられなければ今すぐここから逃げた方がいいぞ。もつじき幹部共が視察に来る」

じいさんがモニターのスイッチを押すと、ドレスを着た女性とスーツを着た女性が映り、すぐそこまで来ていた。

「……俺は逃げる。人殺しの手伝いなんて嫌だからな」

「そうか……。お主の脳には戦い方を叩き込んである。自分の身くらいなら問題ないじやろつて。残念なことはお主の活躍をこの目で見れんことじやな。その通路から行けば外に出られるぞ」

じいさんは少し寂しそうに言いながら天井の通気口を指す。

「死ぬなよ、じいさん」

「ふん、若造がいつちよまえに心配するんじゃないわい。とつとといけ、しっし」

可愛げのねえじいさんだ。通気口に入り、俺は亡国機業の秘密研究所から脱出を試みる。
ファントム・タスク

「遅かったな」

本郷 戒が通気口から逃げ出して数分後、ドレスを着た女性とスーツを着た女性がラボの中に入って来た。

「例の坊やが完成したらしいわね。今はどこかしら？ ドクター諸星」

「お主らがもたついたせいで逃げられたわい」

「んだとお！ てめえ、あたしらを裏切ったのかい！」

スーツを着た女性が諸星の胸ぐらを掴み、持ち上げる。

「はっ、裏切るもなにも僕は初めっからお主らの仲間になった覚えはないわ。研究のために利用してただけじゃ」

「このっ、糞じじいがっ！」

スーツを着た女性が剣を呼び出し、諸星を刺そうとしたが、ドレスを着た女性に止められた。

「よしなさいオータム。まだそう遠くには行ってないだろうから、

あなたは坊やを追いなさい」

オータムと呼ばれた女性は舌打ちして諸星を離し、部屋から去る。

「まあ、坊やのコアには発信器を付けてあるしすぐに回収出来るでしょ」

ドレスを着た女性の言葉に諸星はクッククックツツと笑う。

「何がそんなにかしいのかしら？」

諸星の態度に女性は不快感を隠そうとせずに訊く。

「本郷 戒は僕の最高傑作じゃ。貴様らごときに遅れなど取らんよ」

「……………そう」

ドレスを着た女性が右腕を振るう。

「グウツ!？」

諸星の胸に女性が投げたナイフが刺さり、諸星は倒れた。

「男はやっぱりゴミね」

女性は汚物を見るような目で見ながら諸星をハイヒールで踏みつけ、部屋を後にする。

研究所内にはサイレンが鳴り響いていた。

本郷 戒は改造人間である（後書き）

どうも宏明です。

いかがだったでしょうか？

感想くれると私のやる気が向上します。

次回はついに初変身。お楽しみに！

見ていてくれ……俺の、変身！（前書き）

悪の秘密結社亡国機業によって改造人間にされた本郷戒。諸星博士の手助けにより秘密研究所から脱出を試みるのだった。

見ていてくれ……俺の、変身！

埃っぽい通気口を通る俺は、ある部屋で止まる。

その下には研究員がいた。

「フフフ、ようやく完成した。あのブリュンヒルデのクローンがつ
！」

クローンだと。マジで亡国機業はショッカーみたいな組織だな。

「フフフ、これで無知かつ糞アマ共に頭を下げる必要も無くなる。
なんせ、世界最強が私のしもべなのだから。フフフフ、あははは
ははっ！」

研究員は高笑いをしながら去っていく。

もう通路が無いみたいだし、その部屋へ降りる。

「実際に見るとかなり不気味だな」

部屋の中央には、バイオ液に満たされた筒が五つあり、真ん中の女
の子だけが人間の姿をしていた。

「行こう。ぐずぐずしてたら奴らに見つかってしまう」

彼女も連れて行きたかったが、今の俺では守りながら逃げるのは無理だ。

「……………」

あ、裸の女の子と目が合っちゃった。

彼女はバイオ液の中にいるのだから服を着てないのは当たり前で、しかも目覚めてたのか目が合ってしまう。

「は、ハロー」

とりあえず挨拶を試みたが、彼女は首をかしげて俺を見ている。

そうか、産まれたばかりだから赤ん坊と変わらないのか。

「見つけたぜ、糞ガキ」

部屋のドアが開いてスーツを着た女性が獰猛な笑みを浮かべていた。

ち、彼女に気を取られ過ぎちまったな。

スーツを着た女性の背中から蜘蛛のような機械脚が八本現れた。

「亡国機業のオータム様から逃げられると思うなよ、糞ガキ！」

オータムとかいう女は完全なIS展開状態になると、装甲脚にある銃口から実弾を撃ってくる。

「うわっ！？」

改造人間となった俺は何とか避けた。

しかし、俺が避けてしまったために、銃弾は後ろの筒に当たって、ガラスが碎ける。

「しまった！？」

「他人の心配をしてる暇なんてねえぜ」

彼女の方に意識を向けたとたん、オータムの装甲脚から出た糸に体を拘束されてしまう。

「くそっ、俺のせいで……」

筒から落ちて横たわる女の子がピクリと動く。良かった、生きてた。

「私を無視してんじゃねえぞ！」

「げぼっ！」

オータムの蹴りが俺の鳩尾に入る。

さらにオータムは蹴りを入れて、サッカーボールのように俺を壁に叩きつけた。

「ヒヤハハハ！　いくらISと融合してるからって、男が女に勝てるわけねえんだよ」

「ぐうううっ！」

糸が徐々に締まりだし、とても痛い。

「安心しな、てめえは大事なモルモットだからよ、殺しはしねえ。だけど抵抗されるのは面倒いからまた手足をもぎ取ってやる」

「ッ……また？」

痛みで気を失うことも出来ず、訊き返すのがやっとだ。

オータムの顔が楽しそうに、そして醜くく歪む。

「覚えてねえのか？ お前が乗ってた飛行機をぶっ壊したのは私さ。不幸にもコアが秘密利に輸送されてたせいでお前以外は死んだ。まあ、お前の腹ん中にあるコアのおかげで生きているんだから幸せかどうか？ 一人だけ助かった気持ちは。寂しいかい？ げひやははははっ！」

俺は自然と拳を力いっぱい握り、歯を食いしはる。

こんな外道に俺の家族や身体、無関係な人が何もかも奪われたっていうのかよ。

赦せない。こいつだけは絶対に！

腹の部分が焼けるように熱い。

そして不思議と力が湧いてくる。

俺は立ち上がっていた。

「んだあ？ まだ抵抗するつもりか？ てめえがどんなに頑張ってもアラクネの糸は切れねえよ。諦めな」

そんなことはない。俺はもう、ただの人間じゃないしな。

望んで手に入れた力じゃないけど、俺が尊敬するあの人達と同じ力を持ったんだ。

「ウオオオオオオッ！！」

「男つてのはなんでそんなに見苦しいんだよ。ウゼエ」

獣のような雄叫びをあげながら腕に力を込める。

「ガアアアアッ！！」

オータムが呆れながらも装甲脚の銃口をこちらに向けた。

「らああああッ！！」

ブチブチッ！

「なっ、なんだとお!？」

ようやく俺を拘束していた糸が千切れた。

「は、はん。糸を切ったくらいで勝てると思うなよ」

我を取り戻したオータムは二本の装甲脚で俺に殴りかかってくる。

それをしゃがんでかわし、装甲脚の一本を掴んで背負い投げ。

投げ飛ばされたオータムは空中で体勢を整え装甲脚で壁に着地した。

「うおおおっ！」

自分でも驚くほど速い突撃。オータムに渾身の突きを打ち込む。

「だから言っただろうが、いくら融合しても男が女に勝てねえつてよお」

「う……」

だけど、その拳は4本の装甲脚によって受け止められた。

「ハッ、ハアッ！ さっきのお返しだ！」

「うおっ！？」

がっちりと掴まれた腕を持ち上げられ、バットのよつに振り回された俺は壁に叩きつけられる。

「ガッ！？」

くっそ……、こいつ強い。

力は湧いてくるのに全然通じねえ。

「やっぱ、ザコをなぶるのは楽しいなあ。おら！ 泣け、卑ざまづけ。そして死ね」

オータムの足が俺の腹や顔を踏む。

フォーマットとフィッティングが終了しました。

なんだ？ 急に画面が出る。

そういえばISはまず、操縦者の情報をインプットし、ISが操縦者の事を理解するんだっけ。

そして理解したら最も適した姿に変える。それが『ファースト・シフト』

うーん……。ISのことなんて全然知らなかったのに改造されたせいで必要な事はすぐにわかった。

ははっ、本当に俺は人間じゃなくなっただんなあ。

でも、そのおかげで俺は今踏んづけている奴を倒せる力を手に入れた。

俺なんかじゃあの人達みたいにはなれないだろうけど、せめて家族や一緒にいた人達の仇だけでも取らないとな。画面のOKボタンを押す。

「……その汚い足を退けるよ、オ・バ・サ・ン？」

「ッ！！ てめえ、私はまだ二十代だ！」

怒ったオータムが足を上げて、頭を踏み潰そうとするのをかわす。その間に最終調整が終わった。

「悪の秘密結社亡国機業、俺はお前らのような奴らを絶対に赦さない」
フアントム・タスク

「別にお前に赦してもらう必要はねーよ。一人で何が出来るってんだ」

「お前を倒すことができる」

そう言うのと、オータムは腹を抱えて大笑い。ついでに壁を壊す。

「はははは！ 笑い殺す気が。ちゃんと現実を見るよ。それとも頭がいかれた？」

そう思うなら勝手に思ってる。後悔しても知らねえからな。

「見せてやるよ。俺の本当の力を」

左腕を腰に、右腕を左肩の前までに上げる。

すると、腹にベルトが現れ中心のISSコアが光輝く。

「ライダー……」

右腕を右肩まで持っていていき、素早くさつきとは逆のポーズをとった。

「変身！」

コアが更に強く光る。俺は黒と緑の装甲に銀色のグローブとブーツを纏い、飛蝗を模した仮面を装着。最後に赤いマフラーが首に巻かれた。

「なんなんだよ、その姿……。ISなのか？」

あり得ないと言わんばかりに驚くオータム。

「覚えておけ。俺がいる限り、お前達の野望は必ず阻止してやる。この……仮面ライダーがな！」

さあ、第2ラウンドを始めようか。

見ていてくれ……俺の、変身！（後書き）

どうも宏明です。

ついに変身しました。見た目は仮面ライダーアキアを参考にしていますが、ただればいいかな。

詳しいことはいずれ設定を載せます。

次回、蜘蛛怪人……じゃなかった蜘蛛女こと、オータム戦決着。お楽しみに！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4612z/>

IS～仮面戦士の名を継ぐ者～

2011年12月21日10時47分発行